

月：文苑

著者	しほう
雑誌名	龍南會雜誌
巻	7 7
ページ	8 9 - 9 2
発行年	1900-02-28
URL	http://hdl.handle.net/2298/5493

でしを。今日一日は生き延び得たらんやう。店の女のもち出でし番茶の濃きに胸撫で下ろしぬ。』

（世界破滅の浮説も隕石の流下と共に夢の如く忘れ了りぬ。世界は今白日の下公轉自轉をなしつゝあり。予は實に之を祝す。予は實に世界か此の大破滅に價するものあるを悲えむ。庚子一月附記）

月

しはう

大空高く照えては、涼しきユナと稱へられ、青海原遠く輝きては、美しきデアナと歌はれ、女神、この世の萬物は女神の和かき光に照されて、暖かき平和の夢を貪りつつあり。人世に慰藉を與へ詩人に光明を贈り、暗に迷へる塵の子をして、前途の光明に希望の念を抱かしむるものは女神にあらすや。白藤の花ちる夕、われは、月に對して天國の春を理想せしよ。葡萄の影涼しき月夜、われは、ハイチーを繕きて理想の愛を描き、よ。浮世の惡魔は、人世を導きて闇黒の淵に擠さんとし、忍えきマガツカミは、聲をあげて世界の滅亡を叫ぶ、されど、やさき女神は、美えき笑みと、清き光とを放ちて、此の世の平和を示す。見よ、女神が無言の言葉と、沈黙の訓との中には、如何におほくの意味と、如何におほくの教訓とを含めるかを。アポンの流長へに清くして、

エデンの花千古に香しきところ、女神は絶えず光明を放ちて、人の子に慰のかゝやきを與ふ。詩人―熱き涙多き詩人、―歌人―温かき血湧ける歌人は、女神が淡きの中に、何ものかを秘める微妙の囁きを聞いて、感情の絃線を震はするを禁ずる事能はず。見よ、女神の照すところ、光明あり、女神の輝くところ、理想あり、女神のまたゝくところ、平和あり、快樂あり、希望あり。

人もし、花の影うつる小川の春を美しといはゞ、われは、月の香匂ふ新玄ほの色を、氣高しといはむ。人もし、日影さす野するの色をよまといはゞ、われは、花の香宿る月の光りを、巧みなりといはむ。見ずや、金爐香残りて春殿夢暖きところ、月は花影を移して欄干に止る。

泣くを止めよ、年わかき乙女子、なれは月に向ひて何をか恨む。その小さき胸に、何ものをか描きたる。なれが涼しき眼をあげて、一度清き月影を望まずや。なれは何をか願ひ、何をか望む。見よや、花影洩るゝ美まき月の光りを。なれが願へる清き愛と、なれが欲せる美まきこひとは、絶えず佐保姫の袖より、洩れつゝあるにあらずや。

されど月よ、なれは知れるか。神は世の人の慰藉物としてなれを作れり。而も世の人はなれに對して一種の悲觀を有す。錦江の流水瘦せて、胡地霜白きところ、人は半面の琴を抱いて、馬上漢家萬里の嘆を月影によせぬ。萬里の行人馬に上る時、深閨の嬌婦腸を斷つ所月は常に冷かなる光もて、衷涙の袖に宿る。足柄山の笛の音は、今も尙松風に恨をよせ、銅雀臺の春の月は、修羅の男叫の形見を偲はまむ。大厦高樓岐阜燈

どもと連ぬて、月まつ納涼の夜には、蚊遣火に泣く孝子あるべく、鋪ふ力重のノリの下に花を咲せて、たもえろと見る雪の月には、節婦とてえに涙を拭ふとかや。月は悲めと人に照らず、嘆げゝとて空に輝かず。されど、人はこれがために悲み、これがために嘆く。

止んぬるかな人世、人はインベルソウの中に生れて、インベルソウの中に逝く。おそろしきインベルソウは、人の子を抛ちて、より深きインベルソウの底に落す。パイロンは、インベルソウの人なりき、ゲーテも亦インベルソウの人なりき、人は世途の崢嶸と浮世の波瀾に逢ふときは、多くインベルソウの中に迷ふ。咎むるを休めよ。インベルソウはある意味に於て、人に一種の自覺を與ふ。

パイロンは血に泣きて、疑と人の子と、叫びシルレルは聲あげて、理想は消ゆと呼べり。人は神の手によりて作られ、又神の手によりて滅さる。神の心によりて作られたる理想は、神の心によりて汚されざる可からず。世は惡魔の競争場にまて、世界の歴史は、惡魔競争のコースにあらすや。夏の小川に美えき白百合を見とめて、清き香を嗅がむとすれば、いたまゝいかな、蝮蛇其の手を刺しぬ。春の野すゑに、あいらしき小菫花を根ぼと來て、我が妹に贈らんとすれば、悲えいかな、花は已にしほみぬ。人に正義なく、世に光明なく、小人跋扈し、詩人輕蔑せらる。かれが作は如何にめでたきも、かれが詩は天國の春を理想せしむるも、世の人はこれに向うて、一片の同情を花に有せざるなり。止んぬるかな、世界はわれ等が爲に作られ、まゝのものにあらず。われはサツ

ボ一の死の晩かりしを悲まむ。

此の世の花は常にもろくして、詩人の涙は已に涸れぬ。聖者静けき窓の戸に、無象の天を伺ふとき、悪魔はこゑあげて『死』と叫べり。あゝ、瀬川は遠し、汨羅は水濁れり。首陽の蘇徒に長くして、折る人なきを恨む。せめては匂ふこひの花、こも亦果敢なき露の間の命にあらすや。

われはこの世に就て、あまりねはくの望ど、願どを有せず。われは吾が理想に描ける、一種の樂園に遊びて、此の世の不平と憤悶とを慰めん。此の世の美酒は濁れり。かしこの美酒は澄めり。あゝ吾が理想の樂園よ、其所に美まき花あり、清き月影あり、あいらしき小蘆花あり、やさしき姫百合あり。れもへ、その花影に慰めり、その月影に光りあり、その小蘆花に涙あり、その姫百合に香あり。われはこの花かげに眠り、この月影に臥し、この小蘆花に同情の涙を置き、この姫百合に天國の香をかき、清く、尊き、一生を送らんとす。あゝ吾が理想の天國の、其所にアポンの流あり、エデンの花園あり。此の流れに美まき月輝けり。月影に乙女眠れり。眠れる乙女に、清き愛あり。われは、この清き愛を渴望ま、美しきこひを想理す。

われは祈る神よ、願くはこの花園をえて、長へに美しからえめよ。この小川をして、長へに清からえめよ。この乙女をえて、長へに氣高からしめよ。

初春の詞